様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１３９５

研究課題名（和文）「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary research on the development of "imitation" technology and the transformation of traditional customs

研究代表者
野口　直人（Noguchi, Naoto）

東海大学・建築都市学部・助教

研究者番号：７０８０３３９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本、中国、ベトナム、カナダ、ヨーロッパといった各地域における模する技術の伝統的習俗、人体模型や動物のはく製などの人間や生物を模する行為、建築模型の製作や展示、考古学における3次元計測、3Dプリンタの利用といった実践的な模型世界について、建築学・考古学・民俗学・美術史・社会学・人文地理学・文化人類学などから学際的な検討を試み、その背後にある模する行為の意味を問い、人類の模する行為の共通点や特徴を抽出することを目指した。これらの多様な社会における模する行為の分析を通して、オリジナルと異なる模型性／模型の真正性が獲得されている様子が見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　人類史が始まって以来の行為である「模する行為」を広い視野で検討する学際的な研究基盤の一端が形成できた。特に、模型制作の実践まで視野に入れたことにより、モノづくりや技術の進歩といった多角的な視点から模型を扱う視角を得たことに大きな学術的意義がある。
　また、各研究者が扱う模型の写真を中心にまとめた成果報告書『Homo Mimesis　人類はなぜ模するのか』の発刊を始めとして、教育現場における模型制作の実践、建築模型の制作・展示など、研究成果を写真や実物、模型制作の実践などを通して社会に分かりやすく公開できた点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research focused on a practical model world, specifically, traditional customs of imitation techniques in Japan, China, Vietnam, Canada, and Europe, including the imitation humans and living things by the production of human models and stuffed animals, the production and exhibition of architectural models, 3D measurements, and the use of 3D printers.It attempted an interdisciplinary examination including the fields of architecture, archeology, folklore, art history, sociology, human geography, and cultural anthropology.
We investigated the nature the behavior imitated, and tried to extract commonalities and characteristics of the behaviors and qualities imitated by humans.
By analyzing the act of imitation in these various societies, we found that models, which differ from the originals, actually acquire authenticity.

研究分野：建築学

キーワード：模する行為　模型　真正性　伝統的習俗　身体　技術

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自然物から道具を作ることは、人類を類人猿からわける大きな特徴のひとつである。人類は、生活の役に立つ道具を作ることと並行して、何かを模して、模した物を作り続けてきた。壁画を描いたり、土偶を作ったり、なぜ人類は「模する行為」を行うのだろうか。これまで、各時代、分野における模型研究では、この人類社会にとっての「模する行為」自体を問うてはこなかった。3 次元計測、3D プリンタの利用などにより飛躍的に複製技術が進歩している現代社会において、個別の模型の議論を超えて、人類社会にとっての模する行為の意義を問うべき機会が来ているのではないだろうか。

模型に関する研究としては、古くは縮減模型（ミニチュア）についてのものがあげられる。レヴィ＝ストロースは、美術とは縮減模型をつくることで、縮尺すること自体のなかに美的快感が含まれると指摘した（レヴィ＝ストロース 1976『野生の思考』みすず書房）。バシュラールは、世界を巧みに縮小することは確実に世界を所有することであると指摘した（ガストン・バシュラール 1957『空間の詩学』思潮社）。ベンヤミンは、技術的複製品には、芸術作品に含まれる一回限り存在するという「アウラ」が欠けていると指摘し、真正性研究の基礎を築いた（ベンヤミン 1999『複製技術時代の芸術作品』晶文社）。

このベンヤミンの指摘のように、近現代社会においては「模した」物はオリジナルに比べて低く評価されてきた。しかし、近代以前においては、大量生産技術が発達する以前の日本美術における模倣の位置づけ（島尾新他編 2013『写しの力―創造と継承のマトリクス』思文閣出版、山田奨治 2002『日本文化の模倣と創造』角川選書）にみられるように、「模写」「写し」などが芸術表現として確立していた。社会学においても、20 世紀中ごろから大量に生産されるようになったプラスチックモデルを対象として、メディアとしての模型を分析した論考も登場している（松井広志 2017『模型のメディア論―時空間を媒介する「モノ」』青弓社）。

本研究は、オリジナルの代替物として生み出された「模型」に新たに別個の価値が付与される、つまり、オリジナルとは異なる模型における「模型性の創造」を捉えていく試みである。

２．研究の目的

本研究は、日本、中国、ベトナム、カナダ、ヨーロッパといった各地域における模する技術の伝統的習俗、人体模型や動物のはく製などの人間や生物を模する行為、建築模型の製作や展示、考古学における 3 次元計測、3D プリンタの利用といった実践的な模型世界について、建築学・考古学・民俗学・美術史・社会学・人文地理学・文化人類学などから学際的な検討を試み、その背後にある模する行為の意味を問い、人類の模する行為の共通点や特徴、志向性を抽出することを目指した。

模型に関する先行研究は、各年代や社会に特定の対象を個別に扱い論じてきた。本研究計画の位置づけとしては、各地域社会に固有の伝統的習俗やその変化、そして建築、考古学、展示、教育、娯楽など多様な「模する」文脈を横断的に検討することにより、人類にとって「模する行為」の意味を問うことにある。

３．研究の方法

本研究は、多様な社会における模する習俗、文化についての現地調査、考古学資料や建築学における模型の製作、利用などの学術実践からなる。各研究者によって専門分野が異なるため、対象や研究手法によって以下の 3 領域に分けられる。

(a)「模する」技術の伝統的習俗

課題 a は、「模する」技術の伝統的習俗として模型の歴史、伝統的模型について分析した。安田は日本近世における動植物表現を題材に、複製技術以前である日本近世期の「模倣」技術、文化を分析した。今石は、日本の年中行事において花や農具などを身近な素材で作り、豊穣や安寧を祈願する習俗について文献調査や現地調査から明らかにした。大塚は、ベトナム南部における紙製祭祀用品を取り上げ、他界観の違いや社会変化を検討した。

(b) 模型と身体

課題 b は、「模型と身体」として、人体模型や動物の剥製を取り扱い、人間や生物を模する行為について検討した。妙木は、ヨーロッパの蝋製人体模型や日本の手作り妖怪を取り上げそれらの生成、受容プロセスを明らかにした。高山は、実在した人物を写実的に描写する慣習のなかった東アジア（中国、日本）においてどのように銅像が受容されていったかを分析した。山口未花子は、カナダ先住民の動物を模した装飾品や道具、また博物館における動物標本の生成プロセスを明らかにした。

(c) 模型の現代的利用

課題 c は、模型の現代的利用として、建築模型、3 次元プリンタ、航空模型を取り上げた。野口は、建築模型の製作・展示を通して、建築模型が持つ意味を分析した。田村は、博物館展示に

おける3次元プリンタの利用の検討を通して模型の役割の変化を明らかにした。山口睦は、航空模型の歴史、受容について福岡で現地調査を行い分析した。

４．研究成果

研究成果については、対象物として（1）生物と（2）人工物に分けて論じる。

（1）生物を模す

今石は、日本の小正月に木、竹、藁などを材料として花、繭玉、穂などを模す「ツクリモノ」習俗を取り上げた。世界各地に樹木を加工した祭具が存在するが、その造形物の形態や意味には多様性があるという。たとえば、アイヌ民族では、木製祭具イナウは非常に抽象的に造形、解釈されている一方で、地理的に隣り合い、技術的にも近い本州以南の削りかけは反対に「何か」を模す具象性を目指している。多様な模す行為を比較することにより模す行為の本質の一端が見えた。

山口未花子は、北米の狩猟採集民が角や毛皮などから作る動物の模型について検討した。狩猟採集民にとっての動物との関係性が、動物の造形物を作るプロセスや造形物を身に着けることに表れている。狩り、食べた動物をその角に刻み身に着けることによってその動物と人間が一体化し、感謝を示し次なる狩りの成功を祈ることにつながることが分かった。

高山は、動物の銅像を取り上げて食糧としてではない動物と人間の関りについて論じた。動物が人間社会で果たす役割として、産業動物、展示動物、実験動物などと並んで家庭動物としての役割がある。ペットはもはや単なる愛玩動物ではなく、コンパニオンアニマル（生活する上での伴侶的存在）と言われることもある。人間の銅像は生前の偉業を讃えるものとして作られるが、動物の銅像は慰霊の側面が強く、その死を悼まれる存在となった動物の物語が示されている。

妙木は、医学模型とかかしという 2 種類の人間を模したものについて検討した。身体模造には、大きく2種類あり、第一に外側を模倣する、つまり実在の人間そっくりに作る蝋人形などがあり、第二に臓器などの内部構造を再現した医学模型がある。ヨーロッパ発祥とみられる医学模型が日本に渡り、医学教育に加えて秘宝館という娯楽の場で活躍したことは、蝋人形館と同様に模された人間、人体を楽しむという人間の性質の存在を指摘可能である。医学模型が写実に向かっているのに対して、かかしは簡素な人形であるにも関わらず、暮らしの風景の中に設置されることにより人と見紛う現実味を得る。徳島県三好市山城町の妖怪人形は、地域の人々の心の中にある伝承が具現化したものであるという。妖怪やお化けなど人間の想像力が生み出した存在が、具象化され、立体化され、あたかも実在するかのように捉えられる様子が分析されている。

（2）人工物を模す

安田は、東アジア、日本における絵画の模写を題材として、その目的を学習と保存であると説明した。近世期まで各流派や宗派の「ブランド」を保持するために、師の手本を写すことが広く行われていた。しかし、そこには模する者の筆癖が表れていたり、色を変える、描かれていないものを追加するなど、単なるコピーではなく新しい絵画としての価値が付与されていたという。その一方で、現代の模写として、陶板名画美術館である「大塚国際美術館」を取り上げ、陶板という素材の違いはあるものの、極力オリジナルを損なわない形での複製が心掛けられており、それは鑑賞者のためという目的によって形作られている。絵画の複製、という共通点はあれども、その目的において異なるベクトルが見られると論じた。

大塚は、ベトナムにおける紙銭を取り上げた。紙銭とは、経済的には価値のない紙幣であり、中華世界から始まり、神や死者への儀礼の中で捧げられ、燃やされる。紙が燃えることにより神や故人に届き、現世と冥界とをつなぐ役割を果たしているという。よく燃えることが重要なチープな造りの紙銭が果たす役割を分析した。

山口睦は、精密飛行機模型（ソリッドモデル）を取り上げ、飛ばない飛行機を木や金属を材料として一から手作りする意味を問うた。プラモデル以前の模型飛行機づくりの歴史を振り返り、現代社会においてソリッドモデルづくりをする人々に着目し、その技術や動機について検討した。

田村は、現代社会における模型技術の最先端といえる 3D プリンタの学術的実践と展示について論じた。「情報の複製」と言える模する行為の最新技術として、3D プリンタは模する行為を変えるのか、社会の何を変えうるのかについて検討した。試行錯誤が続く 3D プリンタの利用方法のひとつとして、考古学資料の土器の複製展示を事例とした論じた。

野口は、建築家として数々の建築模型を製作する事例を通して、建築を模する行為がもつ意味について論じた。人が住む大きさという建築物の最大の特徴を捨てて、小さく作られる建築模型では、構造や材料を正確に再現することによって建築のエッセンスが表現されるわけではない。鑑賞者の知覚・認識を手掛かりとして、素材、作り方、大きさを操作することにより身体に訴えかける模型が作られるという。

以上のように模する対象物がある模型には、オリジナルと模型の間に形象上の類似性と差異性が必要とされる。類似性と差異性については、その目的に応じてオリジナルと模型との間に、拡大／縮小、抽象化／具象化、写実性／省略などのベクトルがある。そして、作られた模型には、オリジナルとは異なる模型としての新たな価値が認められていることが定義となる。このオリ

ジナルとは異なる模型としての新たな価値を「模型性／模型の真正性」と呼ぶ。本研究で明らかになった模型の真正性は以下の通りである。

（1）で取り上げた動植物や人間を模する行為からは、模される対象への人間による働きかけや、人間と対象との関係性が現出してくる。模される対象物から失われたのは、いずれも生命である。命あるものは必ず終わりを迎えるため、生物を模型にすることにより得られるのは生命の再現性や永続性である。

（2）で取り上げた人工物を模する事例からは、模型の素材の特徴や模する行為の目的、作る行為が製作者にとって持つ意味や重要性が浮かび上がってきた。各事例における模型性については次のようになる。絵画や考古学資料においては唯一性が失われる代わりに学びや鑑賞、研究の資料となった。紙銭は通貨としての価値を失う代わりに、燃やしてあの世に届けられる。模型飛行機は飛行能力を失う代わりに、机上での所有が可能になった。建築物では住居としての機能を失う代わりに、コンパクトに建築のエッセンスを人々に伝えうる機能を得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 中川朋美，金田明大，田村光平，中尾央	４．巻 3
２．論文標題 SfMとレーザー計測による古人骨計測結果の比較	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈文研論叢	６．最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安田容子	４．巻 36
２．論文標題 19世紀後半の鼠と小鼠	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ビオストーリー	６．最初と最後の頁 40－45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今石みぎわ	４．巻 527
２．論文標題 箕－自然を編む知恵とわざ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 月刊みんぱく	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大塚直樹	４．巻 31-1
２．論文標題 「サイゴン報道」のドラマトゥルギー（上）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『国際関係紀要』（亜細亜大学国際関係研究所）	６．最初と最後の頁 55-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 31-2
2．論文標題 「サイゴン報道」のドラマトゥルギー（下）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『国際関係紀要』（亜細亜大学国際関係研究所）	6．最初と最後の頁 109-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 9
2．論文標題 街路のエクリチュール――サイゴンからホーチミン市へ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『樋――国際関係・多文化フォトジャーナル』	6．最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高山陽子	4．巻 31-2
2．論文標題 中国の烈士表象と社会主義マチズモ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『国際関係紀要』（亜細亜大学）	6．最初と最後の頁 241－261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口未花子	4．巻 950
2．論文標題 ユーコン先住民に学ぶ動物とともに暮らす方法	5．発行年 2021年
3．雑誌名 学士会会報	6．最初と最後の頁 46-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大塚 直樹	4．巻 23
2．論文標題 生活空間における紙銭とその様態 ： ベトナム・台湾を事例として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 立教大学観光学部紀要 = Rikkyo University bulletin of studies in tourism	6．最初と最後の頁 56-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00020478	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 8
2．論文標題 戦争展示と境界線の引き方	5．発行年 2021年
3．雑誌名 榧――国際関係・多文化フォトジャーナル	6．最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 30-1/2
2．論文標題 メコンデルタにおける農業景観とその変貌に関する序論――地理-歴史学的な視点から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『国際関係紀要』（亜細亜大学国際関係研究所）	6．最初と最後の頁 45-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高山陽子	4．巻 1
2．論文標題 紅い戦争のメモリースケープ：ソ連・東欧・中国・ベトナム	5．発行年 2019年
3．雑誌名 紅い戦争のメモリースケープ：旧ソ連・東欧・中国・ベトナム	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高山陽子	4．巻 1
2．論文標題 中国における紅い英雄：メモリースケープとしての烈士陵園の分析を通して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 紅い戦争のメモリースケープ：旧ソ連・東欧・中国・ベトナム	6．最初と最後の頁 145-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 22
2．論文標題 ベトナム戦争期における同時代的な記憶とその再生 ： 在ベトナム日本人のライフストーリー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『立教大学観光学部紀要』Vol．22	6．最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00018751	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 29
2．論文標題 ベトナムにおけるダークツーリズムの社会空間 ： 革命史跡としてのクチトンネル	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『亜細亜大学国際関係紀要』Vol．29-2	6．最初と最後の頁 23-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚直樹	4．巻 7
2．論文標題 模する技術の社会空間――台北の道観・祠廟にみる実践	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『樋：国際関係・多文化フォトジャーナル』vol．7	6．最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高山陽子	4．巻 29
2．論文標題 植民地監獄における正義の語り：旅順監獄博物館の事例から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『亜細亜大学国際関係紀要』29(2)	6．最初と最後の頁 249-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高山陽子	4．巻 7
2．論文標題 銅像よもやま話7　模範人物の銅像	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『榧Kaya国際関係・多文化フォトジャーナル』7	6．最初と最後の頁 30-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口未花子	4．巻 1
2．論文標題 内陸トリンギットと描かれた動物	5．発行年 2020年
3．雑誌名 第34回北方民族文化シンポジウム網走報告書	6．最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口未花子	4．巻 1
2．論文標題 「動物」にとって気候変動はいかに経験されるのか：カナダ北方の森からの視座	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 164-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中川朋美，野下浩司，田村光平，中尾央，金田明大
2．発表標題 SfM/MVSモデルとレーザースキャナーモデルの手法と精度の比較
3．学会等名 日本文化財科学会第38回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 中尾央，金田明大，田村光平，中川朋美，野下浩司
2．発表標題 SfMとレーザースキャナーによる遠賀川式土器の三次元計測
3．学会等名 日本考古学協会第87回総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 中尾央，金田明大，田村光平，中川朋美，野下浩司
2．発表標題 遠賀川式土器の二次元・三次元定量解析結果の比較
3．学会等名 考古学研究会第67回総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 安田容子
2．発表標題 19世紀日本における鼠と小さい鼠
3．学会等名 生き物文化誌学会第82回例会（ネズミ例会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 今石みぎわ
２．発表標題 祈りのかたち　日本と世界の削りかけ文化
３．学会等名 群馬県立博物館第105回企画展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 中川朋美，金田明大，田村光平，野下浩司，中尾央
２．発表標題 古人骨の三次元計測：SfMとレーザースキャナーの比較
３．学会等名 日本情報考古学会第44回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 今石みぎわ
２．発表標題 民俗事例にみる模型ー小正月のツクリモノを中心に
３．学会等名 科研費基盤B「「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（19H01359代表：野口直人）第3回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田村光平
２．発表標題 考古学における文化進化：過去の文化ダイナミクスの復元をめざして
３．学会等名 第27回　産研アカデミックフォーラム「文化を科学する：進化論で社会を理解する」
４．発表年 2019年

１．発表者名 今石みぎわ、大山孝正、篠﨑行雄、平良宣子
２．発表標題 モノが語る人と自然、社会―「箕」をめぐる民俗学的研究―
３．学会等名 日本民俗学会 第71回年会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高山陽子
２．発表標題 銅像とは何か？
３．学会等名 科研費基盤B「「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（19H01359代表：野口直人）第2回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高山陽子
２．発表標題 社会主義と儒教
３．学会等名 「文化としての社会主義」研究会　於：朝鮮大学校
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 描かれた動物が紡ぐもの－カナダ・内陸トリンギットの装飾品”レガリア”の分析から
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 妙木忍
２．発表標題 身体を模する―医学、女性、複製―
３．学会等名 科研費基盤B「「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（19H01359代表：野口直人）第2回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 野口直人
２．発表標題 建築模型について
３．学会等名 科研費基盤B「「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（19H01359代表：野口直人）第1回研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計9件

１．著者名 奥野 克巳、シンジルト、MOSA、宮本 万里、山口 未花子、近藤 祉秋、近藤 宏、大石 高典、島田 将喜	４．発行年 2021年
２．出版社 以文社	５．総ページ数 344
３．書名 マンガ版マルチスピーシーズ人類学	

１．著者名 田村 光平	４．発行年 2020年
２．出版社 森北出版	５．総ページ数 256
３．書名 文化進化の数理	

１．著者名 妙木忍　（編著・監訳：山村 高淑、フィリップ・シートン）	４．発行年 2021年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 410
３．書名 「コンテンツツーリズム」第6章「日本と台湾における妖怪ツーリズム」を単独執筆	

１．著者名 野口　直人（編著：小西　卓三、松本　健太郎）	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 256
３．書名 メディアとメッセージ　第14章「物理的メタファーとしての建築模型」を単独執筆	

１．著者名 田村 光平	４．発行年 2020年
２．出版社 森北出版	５．総ページ数 256
３．書名 文化進化の数理	

１．著者名 Shinobu Myoki (Edited by Takayoshi Yamamura and Philip Seaton)	４．発行年 2020年
２．出版社 Channel View Publications	５．総ページ数 249
３．書名 Contents Tourism and Pop Culture Fandom	

1．著者名 Myoki Shinobu (Edited by Christpher Craig, Enrico Fongaro, Aldo Tollimo)	4．発行年 2020年
2．出版社 Mimesis International (Hasekura League Intercultural Studies Editions, n.4)	5．総ページ数 242
3．書名 FURUSATO 'Home'at the Nexus of History, Art, Society, and Self	

1．著者名 越野 剛、高山 陽子	4．発行年 2019年
2．出版社 北海道大学出版会	5．総ページ数 250
3．書名 紅い戦争のメモリースケープ	

1．著者名 山口未花子（蛯原 一平、齋藤 暖生、生方 史数編）	4．発行年 2019年
2．出版社 共立出版	5．総ページ数 308
3．書名 森林科学シリーズ第12巻森林と文化　-森とともに生きる民俗知の行方-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

【その他記事】山口未花子「動物を糧に生きる」『ほとんど0円大学（ウェブサイト）』
http://hotozero.com/knowledge/hokkaidouniv_yukon/
【制作模型展示】野口直人「Remain Calm展」『SHARJAH ART FOUNDATION』
http://sharjahart.org/sharjah-art-foundation/exhibitions/sharjapan-3remain-calm-solitude-andconnectivity- in-japanese-architecture
【制作模型の展示】野口直人　駐日ブラジル大使館（70年大阪万博ブラジルパビリオン展）　2019年
https://archi-depot.or.jp/ja/archives/1520
【制作模型の展示】野口直人　新潟市美術館（インポッシブル・アーキテクチャー展）　2019年
http://www.ncam.jp/exhibition/5026/
【制作模型の展示】野口直人　広島市現代美術館（インポッシブル・アーキテクチャー展）　2019年
https://www.hiroshima-moca.jp/exhibition/impossible_arch/
【制作模型の展示】野口直人　国立国際美術館（インポッシブル・アーキテクチャー展）　2020年
http://www.nmao.go.jp/exhibition/2019/architect.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高山　陽子 (Takayama Yoko) (20447147)	亜細亜大学・国際関係学部・教授 (32602)	
研究分担者	妙木　忍 (Myoki Shinobu) (30718143)	東北大学・国際文化研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	山口　未花子 (Yamaguchi Mikako) (60507151)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	田村　光平 (Tamura Kohei) (60725274)	東北大学・学際科学フロンティア研究所・准教授 (11301)	
研究分担者	安田　容子 (Yasuda Yoko) (60726470)	安田女子大学・文学部・講師 (35408)	
研究分担者	山口　睦 (Yamaguchi Mutsumi) (70547702)	山口大学・人文学部・准教授 (15501)	
研究分担者	大塚　直樹 (Otsuka Naoki) (80549486)	亜細亜大学・国際関係学部・准教授 (32602)	
研究分担者	今石　みぎわ (Imaishi Migiwa) (80609818)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・主任研究員 (82620)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関